

## 論文概要

### マラウイ貧困層向けマイクロファイナンスの現状と課題 —貯蓄と投資を促進する COMSIP の事例を中心に—

松本 彩

#### 1. 研究の目的と方法

マラウイ国は世界最貧国の 1 つに数えられており、人口 1,810 万人のうち、50%以上が国内貧困線 (National Poverty Line) 以下に位置している。国民の 8 割以上が農村部で暮らしており、インフラの未整備や天水農業に頼る現状のため、食料事情に課題があり、経済発展を阻害している。

現金の貯蓄と借入のために銀行が必要と考えられるが、国民の 8 割が農業従事者であるマラウイの農村から、多大な時間と交通費、敷居の高さ、必要とされる識字レベル、預金額の少なさから、銀行口座を利用しているのは一部の村人だけである。そのような環境下、マラウイの農村にて、村人自身による貯蓄・貸付活動が盛んに行われている。2006 年には、従来の金融サービスの対象にはなり得なかった貧困層を対象としている COMSIP (Community Savings and Investment Promotion) というマイクロファイナンスプログラムが開始された。現在は、貧困層よりも下に位置する最貧困層向けに Social Cash Transfer (現金給付プログラム) が開始され、希望者を募り、COMSIP が結成されている。現金給付プログラムで得られた現金はマイクロファイナンスを実施するための元本になる。現金給付で得た収入を使って、COMSIP で貯蓄・投資を行い自発的に長期的な発展へ寄与するものになるとされている。

筆者は 2016 年 7 月から 2018 年 3 月まで青年海外協力隊として、デッサ県公民教育、文化、コミュニティ開発局 (以下、コミュニティ開発局) へ派遣されており、COMSIP に関わっていた。著者がコミュニティ開発普及員として各最貧困層向け COMSIP グループを巡回していく中で、COMSIP の理念と実際の COMSIP の活動との乖離に気が付いた。最貧困層の COMSIP グループは今までマイクロファイナンスで排除されてきた人たちであり、最貧困層だけで結成するグループを作って活動することで、貧困の悪循環から断ち切ることが期待されていた。しかし、実際に最貧困層の COMSIP メンバーと話す中で、COMSIP メンバーのうち、比較的グループの中でも裕福な限られた人たちしかプログラムからの利益を得られていなかった。

本論文の目的は、マラウイにおける最貧困層の人々がマイクロファイナンスのグループの COMSIP を結成し運用する場合に、(1) 最貧困層が COMSIP に加入する目的と COMSIP の目的ではどのような乖離があるか、(2) マラウイの最貧困層が現行の COMSIP の制度を利用するにあたっての問題点を明らかにする。

また、先行研究による他国の最貧困層の人々が利用する制度とその国のマイクロファイナンスグループ制度とも比較し、考察することで、COMSIP の有効な姿を検討する。

## 2. 論文の構成

### 第1章 研究の概要

- 第1節 研究の背景
- 第2節 研究の目的
- 第3節 研究の方法
- 第4節 論文の構成

### 第2章 マラウイにおける社会保障プログラム

- 第1節 マラウイにおける最貧困層の経済状況
- 第2節 マラウイ社会行動基金の概要
- 第3節 現金給付プログラムの概要

### 第3章 マラウイにおける貯蓄・貸付プログラム

- 第1節 COMSIP (Community Savings and Investment Promotion)
- 第2節 VSL (Village Saving and Loan)の概要

### 第4章 他国におけるマイクロファイナンスの現状

- 第1節 グラミン銀行の概要
- 第2節 CoMSCA (Community Managed Savings and Credit Association)の概要

### 第5章 インタビュー調査結果

- 第1節 調査地及び対象村の概況
- 第2節 調査方法
- 第3節 調査結果

### 第6章 調査結果による考察

- 第1節 COMSIP 制度上の問題点
- 第2節 COMSIP 実践上の問題点

### 第7章 結論

表一覧

図一覧

参考文献一覧

謝辞

### 3. 論文の概要

本論文は7つの章で構成されている。第1章では、研究の背景、研究の目的、研究の方法、論文の構成について述べた。

第2章では、最貧困層をサポートするマラウイの社会保障制度であるマラウイ社会行動基金、現金給付プログラムの現状を明らかにした。本論文の対象者としている最貧困層がどのように定義され、どのような現状かを明らかにし、その中で現金給付プログラムの受益者としてどのように選定されるのかをまとめた。マラウイ政府は国内貧困線以下に位置する人々を「貧困層 (Moderately Poor)」と「最貧困層 (Ultra Poor)」の2つに分けている。「最貧困層」の中には、マラウイの国内貧困線以下で下位10%の現金給付プログラムの対象者の「生活に不十分な極度の貧困層 (Poor & incapacitated)」が存在する。今回、マラウイ社会行動基金で新たに「最貧困層 (Ultra poor)」が対象になり、社会プログラムにフォーカスされるようになった点を変化として指摘した。

第3章では、COMSIPとVSL (Village Saving and Loan)を文献調査と実地調査よりグループの運営方法、資金の管理方法等を明らかにした。COMSIPの目的は、これまでのインフラ中心の支援ではなく、村人をエンパワーし、村人自身が発展していける仕組みをつくることである。COMSIPを運営しているCOMSIP組合連合は、貯蓄と貸付を利用することを推奨しており、また、組織を継続し拡大していくよう誘導していることを述べた。一方、メンバーの自己資金で活動していくマイクロファイナンスであるVSLは、1年間の活動後に解散、すべての資金をメンバーで分配する。現金を一番必要とする時期に分配される仕組みになっており、貧困層のニーズを満たしていることを述べた。

第4章では、グラミン銀行、CoMSCA (Community Savings and Credit Association)を文献調査と実地調査よりグループの運営方法、資金の管理方法等を明らかにした。グラミン銀行は、少額貸付を行うマイクロファイナンス機関である。グラミン銀行の特徴である逆選択はグループ貸付の1つの特徴であるメンバー同士の相互選抜により緩和される。また、メンバー間の相互に監視する機能が働くため、モラルハザードの防止になることを述べた。一方、CoMSCAはサトウキビ農園での児童労働削減のための貧しい労働者コミュニティを対象としたマイクロファイナンスである。貸付のほとんどが教育費と生活必需品の購入に充てられており、投資以外のキャッシュニーズへの対応であることがわかった。グラミン銀行、CoMSCAの運営方法、適切な資金管理が徹底されていることを明らかにした。

第5章では、デッサ州 TA カチンダモートにおける、第4次マラウイ社会行動基金の現金給付受益者への個人インタビューと受益者により結成されたCOMSIPの制度へのインタビュー事例を整理する。個人インタビューでは、COMSIPメンバー、脱退したメンバー、COMSIPに所属したことがない非メンバーの現状を明らかにした。個人インタビューでは、現金給付金の使途を調査したところ、食費の割合が最も高かった。また、現金給付後も食事の回数に変化はなく、食事回数の結果から給付金が給付されても食費は十分ではないことが明らかになった。対象者の職業はほぼ農家であり、自給自足であった。COMSIPへの参加目的の多

くは、貸付・貯蓄等自立に向けた積極的な回答であった。しかし、前述のように、日々の食費のやりくりで厳しい現状を指摘する。グループインタビューでの COMSIP 組合連合から受け取った補助金の有無等の調査では、グループの停滞理由、所持金管理方法の不備により窃盗等問題が発生していることが明らかになった。

第 6 章では、調査結果による考察を行った。制度上の問題として、(1)COMSIP 組合連合とメンバーの貸付ニーズのずれ、(2)社会的安心感のないグループ化、(3)大きな組織へと誘導するインセンティブ、(4)モラルハザード防止策の不在、を指摘した。実践上の問題として、(1) キャッシュが乏しい人の利益にならない、(2)ルール遵守の未徹底、(3)COMSIP 組合連合による研修・モニタリング・指導が不十分、を指摘した。最貧困層の貯蓄・貸付のニーズがあるにも関わらず、COMSIP の機能が破たんしていることが明らかになった。

今回の調査で最貧困層の経済状況を明らかにした。厳しい経済状況であることに変わりはないが、彼ら自身が生活を向上させるため、経済的発展を切望していることが明らかになった。今回の調査対象の最貧困層は経済的、社会的に弱者であり、自然災害や不測の事態に巻き込まれると必然的に大きく経済状況が悪化する。しかし、実際には、多くの人の希望は、働きたい、自立したいという意見が多数を占めていた。これは、対象者の目的と COMSIP の目的は合致していると言える。そのような要望に対し、現金給付金を使い COMSIP 制度を利用し機会をつかむことが期待された。しかし、今回の調査の結果、制度の設計、実際の運営方法は適切ではないことが明らかになった。

マイクロファイナンスの研究は数多く存在するが、本研究においてはマラウイの最貧困層を対象とし、生活の実態を明らかにした点と利用しているマイクロファイナンス COMSIP の問題を明らかにした点に意義があると考ええる。

しかし、最貧困層を対象にした COMSIP は他の地域でも展開されており、文化や現金収入等が異なる他の地域でのさらなる調査が必要であると考ええる。